

---

# ペルソナ～リバウンド～

rai

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ペルソナ〜リバウンド〜

### 【Nコード】

N6745Z

### 【作者名】

rai

### 【あらすじ】

ペルソナの二次著作になりますが、自分の考えるペルソナというもので、ゲームの設定などは特に気にしておりません。

## オープニング

白い錠剤を噛み砕く。

閑散とした宵に響き渡るその音は非常に不気味を感じさせ、口の両端を吊り上げながら闊歩するその姿は悪鬼羅刹のようですらあった。

ぼろぼろと零れ舞う噛み砕かれた錠剤の欠片。その緩慢に舞い落ちる動きが瞬間消えるほどに加速したのは、少女の一步が原因だった。彼女の踏み込みと同時に空間が歪み刹那に割れ、無数の黒い斑点がその中から蠢き、形を得ようと密集していく。

「ペルソナ！」

そして放たれた言葉は契機である。途端、密集していた無数の黒たちは流動の果てにはつきりとした形を成し、少女の頭上に現れる。

長方形の穴が四つほど空いている菱形の仮面の上には、兎のような長細い二つの耳。十字にクロスする、鉄の棒のような胴体部から伸びる二振りの刀は、獲物を今か今かと待ち望んでいるように月光を受けて鋭利に煌めいている。それらを支える脚部は余りに細く、最下部に足袋のような形が僅かながら確認できるだけだった。

「アンデレ」

少女の言葉を受け、仮面に空いてある長方形が薄緑色に光った。全体的に黒い色彩を纏う外観の中でその薄緑は気味が悪く見える。

「狩れ！」

少女の肩まで伸びる漆黒の髪が靡いた。彼女のペルソナであるアンデレは、地から、空から湧き出てきた様々な闇たちに一瞬で近づくと、二刀を乱暴に振りまわし、それらを擦じ伏せ霧散させていく。技量など不必要とばかりにただただ暴れ回るそれはさながら暴風のようにであった。

「微かな残り香を追ってここに来たけど、どうやら正解だったよ  
うね」

眩くその声は凜とした響き。先程まで浮かべていた笑みは闇たちと共に溶けたようだ。

乱れた髪を整え、月へと両手を組んで背筋を伸ばす。それから右手の親指と中指を擦り、パチンと軽快に音を鳴らした。同時に、アンデレは黒い粒子に戻り、すぐさま姿を消した。

少女は歩きだす。その歩調に乱れは無い。

雪も降ってきそうな、乾いた寒い夜に白い吐息を乗せながら彼女は、北ノ沢市に辿りついたのだった。

## オープニング（後書き）

初めての投稿で初めて挑戦する二次創作です。

駄文であり、ペルソナファンの方々にはお目汚しであります  
が、読んでいただければこれ幸いです。

## 一章一話 「Hear a rumor」

溜息が出る。その起因は、青春真つ盛りと呼べる年頃に相応しい恋や勉強について悩みではない。しかしかといってその他に悩むべき何かがあるわけでもなかった。だからこそ彼は、溜息をついているのだ。

そう、何も無い。何も無いのである。

友人はそこそこいるし、成績は振れ幅の小さいメトロノームのように揺蕩たつている。スポーツもできないわけではないが自慢できるほどではない。可愛いと思う女子は数人いるものの、心ときめくかと問われれば、そうでもない。

つまり彼は退屈していたのだ。余りに何も無いこの街に、この学校に、自分に。

かといって戦隊ヒーローを夢見られた頃は遙か遠く、彼は悟らざるを得ないのだ。この退屈は、誰しもが持つ当たり前だということ。そしてその退屈はどれだけ能動的に動こうと、どうしようもない当たり前だということ。

だから彼は襲い来る眠気を払うべく頭を振り、まっさらなノートに授業内容を書き留め始めるのだ。

そんな彼の頭に丸められた紙クズが直撃した。今度のため息は呆れによるものだ。その紙クズが誰によって投げられたのか幾度の経験から理解している。だから彼はノートを千切り、ぶつけられたものより少しだけ大きめに丸めて、教師が黒板に板書をする隙を見計らい後ろに振り返って投げつけた。

しかしその反撃は、こんな時にしか使われることのないノートによって防がれた。そしてそのノートの主は憎たらしくも小さな舌を突き出し、用意していた紙クズの大群で反撃する。

二人の席は人が歩けるような小さな通路に隔てられてはいるが、きつちり対頂角で結ばれており、こんな光景はいつものことなのか

他の生徒たちは特に気にする様子がないし、止めようともしない。

紙クズマシンガンの掃射を受け、少年は頬を引き攣らせた。この眼前の少女が童顔と幼児体型に相応しい性格の持ち主であることは心得ている。心得てはいるが、だからと言って身体中白い粒だらけになったこの憤りを抑えることはできない。例え、挑発に乗り、同じような精神年齢であることを露呈しようとも。

やり返すべく紙クズのストックを大量に作り、彼は再び振り返る。しかし先程まで心底面白そうに笑んでいた少女の顔は、恐ろしさを感じさせるまでに真面目なものになっていた。

その理由に気付くのが一步遅かった。頭が掴まれる感覚がして、体を一度大きく震わせる。

「ゴミ塗れで何をやっているんだ、桐明？」

少年、みやはらきりあき宮原桐明は極めて冷静に応える。

「先生はこれをゴミとおっしゃいますが、それはこの紙たちに失礼だと思いませんか？僕は、材料源となる木に対しても、製紙された工場の方々に対しても常に真摯な気持ちで向き合いたいのです。そしてこれはその真摯な気持ちを具体的に表した結果なのです」

「そうか。紙に対しては真摯な気持ちになれても、俺の授業には真摯になれないというわけだな？」

ぐりぐりと後頭部を強く撫でられ、桐明はハハ、と苦笑いを浮かべながら沙汰を待つ。

「桐明、廊下がお前に恋焦がれているらしいぞ」

「ですよー」

憐れな少年は笑いを必死に堪える少女を一瞥し、それから黙って廊下に向かう。

「ああ、あと琴原」

「え！？」

突然名前を呼ばれ、少女、ことばら琴原皐はびっくりしたように目を見開けた。毎度のことだというのに、どうしてそう驚愕に満ちた表情をするのか桐明には分からない。

まさか本当に、自分は関係ないとシラを切れたつもりでいるのだろうか。

「お前も廊下に立っている」

そう、結局二人で立たされることになるのだ。

桐明が教室から出て、誰もいない静まり返った廊下を眺めること数十秒、臯が頬をハムスターのように膨らませながらやって来る。

「なんで私まで・・・」

「なんでって、明らかにお前が原因だからだろ」

「見つかったのは桐明じゃん。桐明が見つからなければ私が廊下に立たされることもなかったの！」

そう言っただけで睨みつける、つもりなのだろうが上目遣いにしか見えない。桐明は、本当にこれが高校一年生なのだろうかと頭を悩ませるのだ。

「それにしても、暇だな」

窓ガラスから見える街は非常にのどかである。その中心部には大型デパートやそれなりに高いビルが建っていて、時代の流れについていけない老人たちが近年急激に発展した中心部を見ながらこの町も随分と変わったもんだと目を細めてはいるが、桐明にとってそれは当然の光景なのだ。それに、中心部以外は緑の方が多い。この町は確実に、田舎だと言える。

「暇、かあ。じゃあちよつと、刺激的な噂話でもしてあげようか？」

罰として廊下に立たされていることなど臯の頭にはないようだ。

「いいよ。どうせ、酒屋のお爺さんがお化けと白い布団を見間違えたとか、拳銃を初めて手にして喜びのあまり運動会のヨーイドンに合わせて発砲した警察官とか、そんな類の仕様もない話しだろ」

「暇っていつから話してあげよーと思ったのに、もういいよ」

そっぽを向く。快闊な印象を受ける短めに切りそろえられたショートカットが動きを受けて揺れ、横顔を軽く隠す。だが、面白いことに爛々と輝く大きな瞳は隠しきれない。それが話をしたそうに煌

いていることを、桐明は察していた。

しばらく放置すれば自分から話したすのだから彼も暇であることは確かだ。面白いかどうかは置いておいて、授業が終わるまでただ立っているのは辛い。幸い、クラスで授業を行っている教師の声は廊下に響き渡るほどうるさく、小声で話せば気付かれる可能性は低い。

「ごめん。やっぱり、暇だから話してくれ」

すると臯は嬉しそうに満開の笑顔を浮かべ、それから急に顔を赤らめたかと思うと、咳払いをして人差し指を立てくるくると回しながら言うのだ。

「し、仕方ないなあ。そこまで言うのなら話してあげないこともないよ?」

「あ、ああ。よろしく」

やっぱりいい、という言葉をどうにか飲み干して愛想笑いを浮かべる。気を良くしたのか臯は、天保山と比べるのも大変失礼なほどに断崖絶壁な胸を逸らして口を開ける。

「人づてに聞いた話だから私も詳しいことは分からないけどね・・・最近夜になると、この町に出るらしいよ・・・幽霊が」

「幽霊? やっぱり酒屋のお爺さんの話じゃないか」

「最後まで聞く!」

注意され頭を掻く。正直、幽霊ネタは目の前で自慢げに話す少女から聞き飽きているのだ。恐らく今回も、いつもと同じようなネタなのだろうと思い、元から殆どなかった話への興味は皆無になってしまった。

「それで?」

それでも話を促すのは礼儀だ。

「掉神社の近くにある骨董店知ってる?」

「ああ、気のいいお爺さんがいた店か。子供の頃、飴をもらった覚えがある。結構前に亡くなったって聞いたけど」

「うん。その骨董店のお婆ちゃん、つまり、そのお爺さんの奥さ

んなんだけどね。幽霊を見た、ってつい最近いろんな人に話していたらしいんだけど・・・」

桐明の眉根が険しくなる。その先は、あまり面白がって話していることではないような気がしたのだ。だが皐はそんな桐明の様子に気付くことなく、話を続ける。

「それから姿を見かけた人がいないんだって。娘さんが搜索願を出しているんだけど、見つかっていないらしいよ。もしかしたら、お婆さんが見た幽霊が」

「あんまり、楽しい話じゃないな」

そう言い肩を竦めると、皐はばつの悪そうにしゅんとした表情を浮かべる。調子に乗って話していたことを、今さらながら後悔しているらしかった。

チャイムが鳴る。桐明が皐の額にデコピンをかましたのはその時だった。

「いった！・・・何するの！」

「次、昼休みだぜ。早く購買に行かないと、お前の好きなパン売り切れるんじゃないか？」

「あ、そうだ！」

皐曰く、わさびと生クリームを見事に調和させ、まるやかでいてピリツと引き締まった後を引かない辛さが癖になる、らしいワサクリームパンが売り切れになることはよもやないだろうが、それでも桐明は親切に忠告する。

「それじゃあ買いに行つて来る」

さつきまでの陰鬱とした雰囲気はどこへやら。それが皐の短所でもあり、長所でもある、と桐明は思うのだった。

「あ、そうそう」

可愛らしい小さな財布の中身を確認し、渋い顔でその中身の少なさに絶望しながら皐は思い出したよう言う。

「運動会で拳銃を発射した警察官。その馬鹿、私のお兄ちゃんのことだ」

「え？」

本当かどうか分からない噂話より、そのカミングアウトの方が真実味のある分、強烈だった。

一章一話 「Hear a rumor」(後書き)

ペルソナは、3をクリアし、4は途中でやめてしまいました。ただ4のアニメは見ています。が、他は全く知りません。一番面白いナインバリングは何なのだろう。

わさびアイスというものがあるらしいです。食べてみたい。

オレンジ色が空を覆い、そろそろそのオレンジも黒に占めだされるような時は吐く息が白く濁る。綿で編まれたブルンドのマフラーは確かに首元の寒さを軽減してくれるが、全身を温めてくれない。こんな寒い日は動くことが億劫になる。これから、家を通り過ぎた場所にあるスーパーに寄り、食料品などを購入しなければいけない桐明が憂鬱になるのは仕様がなないことだ。

「一食くらい抜いても、大丈夫なんじゃない？」

皐は、学校の自動販売機で購入した温かい缶コーヒーを頬に当てそう言った。その缶コーヒーのプルタブを開けようとしなのは、珈琲が嫌いだからである。それでも珈琲を購入する理由は、子供に見られたくないという意地だ。

「俺はな。でも、姉さんが帰って来るから、食事の用意をしないとやされるんだ」

「かなえ奏恵さん、帰って来るんだ」

「残念なことにな」

大学に進学しこの町を出て行った破天荒な姉は、帰って来る度にお金がないから飯を作れとせがむのだ。無視すれば桐明の五体満足は約束できず、仕方なく作るその料理の腕はいつの間にか自慢できるまでになっている。

正門から続く坂道をゆっくりと下りて行く。次第に緩くなっている傾斜はやがてT字路に合流し、そこには学生たちが手を振り合う風景がある。

しかし、二人は別れない。右に曲がり、帰路につく学生しか歩いていない、舗装の行き届いていない道に行く。

年代を感じさせる古びた家、大きくは無いが多々目に付く田畑。もう少しばかり歩けば辿りつく大きな十字路の喧騒は聞こえてくるが、それでもこの道を歩けばそこに辿りつくという事実には至らな

い。まるで現実から乖離した空間。このほのぼのとした気風に惹かれて都会からきた者もいる。勿論、その逆も然りだ。

「でも、桐明って一人暮らしみたいなもんでしょ？人恋しくなる時とかないの？」

両親が多忙で滅多に帰って来ず、それなりに小さい時から家事を一人で仕切っていた桐明はまあね、と軽く同意してから続ける。

「ただ姉あねさんがいると違った意味で、人恋しさを感じさせるんだよ。誰か助けてくれって」

「そうかな。面白い人だと思うけど」  
「肉親になつてみる。そんな印象、一日で粉碎されるぞ」

「あの豊満な胸に粉碎されたいよっ・・・！」  
歯を食いしばり、語尾を強める皐。深き悲しみを背負う肩に、桐明は手を置いて労ることもできなかった。

学校の校門を出てから八分。丁字路からは三分と行ったところだろう。粗く狭かった道が唐突に大きな交差点へと繋がる。市電の駅が設置されたことよって発展したこの通りには、家電量販店や飲食店、ゲームセンターなどが並んでおり、学校帰りの学生たちが屯する場所でもあるためかなりの活気がある。

「ああ、お腹空いたな」  
小さな桜色の唇に中指を当てて、ラーメン屋を恋する乙女のような瞳で見つめる。だが彼女の財布の中身はその恋を後押しするだけの力が残されていない。

「家に帰れば夕食にありつけるだろ？羨ましい位だ」  
「分かってない、分かってないよ桐明は」

ちかちかと点滅する信号に急かされ、横断歩道を小走りながら大仰に首を横に振る。桐明にしてみれば、母親が夕食を作ってくれることを羨ましいと思うのだが、皐はそれを否定する。

「連日のように出される納豆、ほうれん草・・・お母さんやお姉ちゃんたちが私を気遣う食卓に、私の団欒は無いんだよ」

「納豆？ほうれん草？ああ、成長そくし」

鳩尾という人体の弱点を見事に射抜いた右ストレートが桐明の言葉の先を中止させる。

「お母さんやお姉ちゃんはあるに発育が良いのに・・・悲しいよ！」

弱い力だったものの急所に入れられた一撃が痛くないはずなどなく、犠牲者は前屈みになり、歩幅を狭めた。

「・・・お兄さんは、どうなんだ？」

運動会で拳銃を発砲したらしい兄のことを問うと、皐はなんとも似合わない達観したような表情で軽く息を吐き出す。

「兄<sup>あれ</sup>さんは琴原<sup>うち</sup>家の黒歴史だよ」

「そこまで言うか」

ゲームセンターを通り過ぎると、視界を遮るような高い建物は極端に少なくなる。それからちよつと歩いて一軒家が目立ち始めるようになる、皐の家はもうすぐそこだ。

「あ・・・」

皐の家が視界に入ってきたところで、彼女は呆けたように小さな声を漏らした。何事かとその視線を追い、桐明が成程と納得を得たのは思考を取り戻してからだった。

流麗に揺れる漆黒の長髪の下には、細く長く伸びる眉。常に前を捉えている薄茶色の瞳と、真つ直ぐ張られた背筋からは、強い意志を感じる。夕日に照らされ薄橙色に染まる唇は小さく、開かれれば艶やかな音色が聞こえてきそうだった。

この街には場違いな、垢抜けた感じのする美人だ。皐と桐明が目を奪われたのも無理は無い。ただ、端正な顔立ちの女性の方は、当然と言うべきか、すれ違う二人を気にする様子など微塵もなかった。

「凄い、美人さんだったね」

「ああ・・・そうだな」

その美貌に目を奪われていたのは事実だ。だがそれより桐明が気になったのは、女性の雰囲気だった。伝わる音が早くなりそうな、透明で澄んだ空気をその女性から感じたのだ。

「もしかして、一目惚れ？」

魂を奪われたように立ちつくす桐明に、からかうように問う。

「あそこまで端正な顔立ちの人になると、そんな感情すら湧いてこないことが今日分かったよ」

「何だ、つまらないな」

そう言い、不満げに口を尖らせる。例え誰かを好きになつたとしても、皐には隠しておこうと桐明は心に誓った。

「んじゃ、また明日学校で」

家と外を隔てるアルミ製の門扉の前で皐は激しく手を振る。桐明もそれに応じ、手を振り返す。先にやめた方が負け、と暗黙の了解でもあるかのように長く振り続けられる手だったが、その終焉は二人同時であった。

皐が門扉を開けて家に入ったことを確認してから桐明は再び歩き始めた。彼の家はもう少し遠くにある。最も、家に帰ったところで彼の安息は姉がいる限り約束されていない。だから、彼がスーパーへ向かうその足取りが重いのも、吐きだされる溜息が非常に深いのも、仕方のないことなのだ。た。

買い換えたばかりの蛍光灯が眩く照らすルーの量は目算でも六人前以上。少々作り過ぎたと思いつつも、姉なら全滅させられるだろうと気軽に構えていた桐明だったが、二十一時を過ぎても送られてこないメールに少しヤキモキしていた。滅多なことではメールを送ってこない姉なのだが、食事に関することは例外である。三日前に送られてきた、帰る、の二文字にはだから食事をすぐ食べられるよう用意しておけという命令が込められている。

「今日だよな・・・」

それから一日ごとに送られてくるカウントダウンは今日でゼロとなるはずだった。彼にとっては死の宣告でもあるその数字の減少だがしかし、いつになってもゼロという数字が下されないのも気味が

悪く感じる。

不本意ではあるが姉にメールを送る。返事が来る気は全くしない桐明だが、送ったという事実は彼の身の安全のためにも必要なことだ。

居間にある大きな食卓に座り、テレビをつける。そして一しきりチャンネルを変えたところでその電源を切った。

台所から聞こえてくる水滴の落ちる音。近所の犬が、寂しそうに吠える音。それ以外は何も聞こえてこない。

再び携帯を手に取る。まさにその時、それが振動し、メールの着信を主張した。受信されたメールをすぐ確認する。

メールは臯から送られてきたものだった。内容は、現代文の宿題に関することだ。感想を原稿用紙三枚程度で書いてこなければならないのだが、どうやら彼女は宿題用に配られた原稿用紙を学校に置いてきてしまったらしい。

コンビンに売ってるかも、と返信して携帯を食卓に置く。

「腹、減ったな」

いつまでも姉を待っているわけにはいかない。桐明はルーを温め直すため、台所に向かった。

結局、桐明の姉は帰宅しなかった。メールの返事も来ず、それでも桐明の第一懸案事項は作り過ぎたカレーだった。姉の気紛れな性格に何度も付き合わされてきた彼にしてみれば、帰宅しなかったことは決して心配するべきことではない。

きつと、帰宅途中に美味しそうな食べ物を見つけて満足したのだろう。彼はそう想像しながら鞆を机の上に置くのだ。

「よつ。相棒（こいつ）は一緒じゃないのか？」

椅子に座った桐明に、陽気そうなクラスメートが話しかける。桐明は作り過ぎたカレーを引き取ってもらおうと思っていた臯の姿が見えないことを確認して、首を振る。

「一緒に登校してるわけじゃないからな。でも、珍しいな。この時間に、しかも朝会があるこの日に臯が来ていないなんて」

授業はサボりがちな臯だが、学校に登校してくる時間は早めだ。

「だよな。あの生徒会長様の御言葉を拝聴できる朝会がある日に来てないなんて珍しいよな」

鞆に入っている教科書類を机の中に入れる。空になって薄くなつた鞆を机の横に掛け、桐明は口を開ける。

「ま、臯が休むとは到底思えないし、そのうち来るんじゃないか？それより御子柴、貸してたゲーム、いい加減に返せよ」

御子柴颯太の苦笑いは実に見飽きたもので、今日もそのゲームを持ってきていないことが容易に想像できた。それから続く言い訳のバリエーションは豊富だが、その結末は桐明にとって常に悲劇だ。

「すまねえ。本当に、本当に明後日持つてくるよ。昨日やっとならスポスマでたどり着いたんだ」

「一週間前も同じこと言ってなかったか？」

「ラスボスかと思つたら中ボスだったんだよ。恰好良すぎる二つ名に騙されたぜ」

だが、腰に手を当て笑う颯太にいつも通りの諦観を感じることは無かった。桐明の視線は颯太の方向に向けられていたものの、見ている先はその後ろだった。

幽鬼。そう見紛うたのも当然と言つべきか。健康的な肌色が抜け、生気感ぜられない蒼白に染まる顔。覚束ない足取りでゆらゆらと揺れる体。どこに向けられているか分からない虚空を見る眼の下で大きく陣を張る隈。

何よりの異常は、それに気付く人間が桐明以外にいないことだ。

賑やかな教室内に混ざる一点の異変。それは黴のようだ。目に留まらぬほど小さな一点がじわじわと浸食し広がっていく。気付いてからでは遅い。もう、どうしようもないのだ。

「臯！」

思わず桐明はその異常を叫んだ。突然の大声に首を捻る颯太だっ

だが、気だるそうに頭を持ちあげる臯に気付き、その表情を見てゾツとしない心地になった。

臯という人間は、身長や精神年齢を揶揄されて怒ったり悲しんだりすることはあるが、基本的には屈託がなく嫌なことはケロツと忘れる性格の持ち主である。また、無遅刻無欠席を目指していて、その達成を容易に思わせる壮健な人物でもある。桐明も颯太も、半年以上の付き合いから彼女のことをそう認識している。

では、無理やり微笑もうとして頬を痙攣されるこの少女は何なのだろうか。気分や体調が悪いという次元ではない。桐明は、もつと深い場所にある何か、人間であるための根源とも言えるものが臯から抜きさられているような気がしていた。

「おはよう・・・桐明、御子柴・・・」

「おはよう、じゃない！今すぐ保健室に行くぞ！」

桐明の大声でようやくクラスメートも臯に気付いたらしい。彼女の女友達が顔色を窺いに寄って来る。

「大丈夫・・・大丈夫・・・」

大丈夫を言葉にし続ける臯の手から、重そうに持っている鞆を取り颯太に渡す。それから空いた手を掴み、その驚くべき冷たさに桐明は身を竦ませた。だが、すぐに気を取り直して力を籠める。

「家族に休むよう言われなかったのか？」

「言われた・・・けど・・・大丈夫だと、思ったから」

廊下にいる生徒たちの注目を浴びながら保健室に向かう。桐明たちの教室は校舎の三階にあり、保健室は一階だ。

学校まで歩いて来られたことが奇跡に思えるくらいに不安定な足運びを支え、やっとのことで保健室までたどり着き、その扉をノックする。

「先生、居ますか？」

しかし返事は返ってこなかった。中から物音も聞こえず、養護教諭は不在のようだ。だからといって臯をこのままにしておくわけにもいかない。もう一度だけノックをして、中に入る。

「ありがとう」

ベッドで横になり、清潔な真っ白の毛布に包みながら皋は礼を言った。その素直さはいつもの彼女には無いものだ。

「気にするな」

見つけた体温計を皋に手渡す。だが彼女は手に取ったそれを眺めるだけで、使おうとはしない。

「どうしたんだ？」

「・・・多分、病気じゃ、ない」

体温計が落ちる。それを握っていた手は震えていた。

「は？」

「見たの」

気だるげに上半身を起こす。それから皋は顔を歪ませ、震える唇からなんとか言葉を紡ぎ出した。

「深夜、コンビニに・・・原稿用紙を、買いに行く時に・・・幽霊・・・うつん、幽霊と呼んでいいのか・・・すら分からない、何かを」

「・・・幽霊？」

言ってから、桐明は悔やんだ。

皋は笑った。見ていられないほどに痛々しく。その笑顔が何から生まれたものであるかを理解する前に、彼女の言葉が桐明の思考を遮った。

「何て、ね。冗談だよ。寝れば・・・治るから、こんなの」

そう言い、毛布に包まる。

「あ、ああ・・・」

何と返せば正解なのだろうか。

分ならず、桐明は頷き立ちつくすことしかできなかった。

一章二話 「It saw」 (後書き)

PS3でペルソナ4が発売されるようです。お金ができれば買おうかな・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6745z/>

---

ペルソナ～リバウンド～

2012年1月6日20時50分発行